

町家合宿 in 京都 vol.7

～食事についてその①～

山下桂永子

町家合宿の始まり。駅の改札口に集合し、挨拶と自己紹介を一通りすませ、まず決めなければならないことがある。「今晚なに食べたい？ただし食費は1人1回500円ね」である。初めての参加者はたいてい少しポカンとする。昼の3時ごろに夕飯のことについて聞かれ、1食500円と言われても、慣れない場所にやってきて、普段金額を強く意識して食事することはあまりないであろう中高生にとっては、イメージが全く湧かないのかもしれない。

スタッフが緊張をほぐすように、「昨年や一昨年は、ああだったこうだった」などと話しながら、駅前のスーパーマーケットに向かい、町家に向かう前に、その日の夕飯の買出しをしている。

☆1回の食費は1人500円

町家合宿には11年間変わらぬ「1回の食費は500円」というルールがある。朝食だろうと昼食だろうと夕食だろうと500円である。そして、何を食べるのかは参加者それぞれの希望をその場で聞いて、可能な限り希望に沿うものを買ったり作ったりするというスタイルである。

毎年食事の希望を聞くが、メニューがすぐに決まることは少ない。これといった希望は出ないものの、食べ物の好き嫌いを聞けば、それはたくさん言えることが多いので、食に興味やこだわりがないわけではないのだろう。しかし、「これが食べたい」というものが出ない。

当初はそれでかなり苦勞をした。古着交換とは違って、他人のものを選ぶわけではない。自分が食べたいものならば、もうちょっとあれ食べたいこれ食べたいと、むしろこちらが困るぐらい希望が出たらどうしようなんてことも想定していたわけである。しかし、今自分が食べたいというものがこんなに思いつかないものか、あるいは表現できないものかと戸惑った。それでも全ての行動において、参加者が「選ぶ」「決める」という自己決定を重視する町家合宿で、参加者から希望が出ないからと言って、スタッフが食べたいものを言うわけにもいかないし、それでも誰かが決めないとごはんが食べられない。とても困った。そこで事前に希望を言わなくても、自分で食べたいものを「選ぶ」「決める」ということを多少なりとも促すために、工夫することにした。

☆朝食について～残り物や朝マッ○～

町家合宿では、朝食には、前日の夕食の残りや、おにぎりや味噌汁を準備して、食べただけ食べるというパターンと、ファーストフードやレストランのモーニングサービス（バイキングで 500 円という破格のところがある）に行き、それぞれ 500 円以内で買ってみんなで食べるパターンが多い。

朝食は、特に参加者の希望が出ない。考えてみれば、朝食に何を食べたいのか毎日しっかり考えている人がどれほどいるだろう。食事の中でも一番ルーティンになりやすいのが朝食であると思う。家庭によって、1人で食べているのか、家族と食べているのか、パン派、ごはん派も様々で、朝食を食べない人だっているだろう。その中で、自分は普段これを食べているということは言えても、自分は明日の朝食にこれを食べたいとイメージし、それを言えるのは、なかなか難しいことなのかもしれない。



朝食バイキング。朝から欲張って和洋関わらずたくさん取ってしまう。

☆昼食について～学食での大学生体験～

大学見学を観光に入れるので、昼食は大学の学食で食べることにしている。学食では、500 円あれば好きなメニューをお腹いっぱい食べることができる。安いし美味しいし量も多い。お茶やお水もセルフで温冷揃って無料である。定食から丼もの、麺類、デザートまでたくさんのメニューが揃っていて、実際のもがイメージしやすいせいか、参加者が楽しんで選ぶことができる。子どもが大学に行きたいと言わなくても、希望した観光地の近くにある、(学食のある) 大学をチェックして、昼食はそこで取るようにしている。

学食に入り、席を決めたら 500 円玉を一人ずつに手渡しして解散する。大学生に混じりながら好きなメニューを選んでお盆にのせてお金を払い、みんなでわいわい食べる。おつりとレシートは回収するのだが、たいてい初参加の子は結構おつりを残してくれる。初めて的时候は、メニューに値段は書かれているものの、何をどう頼めば 500 円以内におさまるのか想像がつかず、不安なので、少なめに頼んでしまうようである。一方、慣れている子はおつりが数円というのも珍しくない。498 円や 499 円でおさめてくるつわものには、拍手喝采が送られている。

午前の疲れなのか、大学見学という慣れない場所や人の多さでの緊張なのか、何も食べないという子もいる。教室や施設を見学するだけでなく、実際に大学生になりきって学食で食べることは参加者にとって、負荷がかかることであるのかもしれない。

「学食がうまかった。からあげらーめんとんこつのもやしはやばいぐらいうまかった。」と感想文で書いていた A さんは、それまでもやしが大嫌いで、家では全く食べていなかったらしいが、この学食でもやしを食べてからというものの、その後の町家合宿の夕食で出たもやしもたくさん食べていたし、家に帰ってからも自分でラーメンには必ずもやしを入れて食べるようになったと保護者から聞いた。感受性が強くてこだわりや好き嫌いが結構激しい A さんが、苦手なものを、学食でたくさんの人の中で、おしゃべりしながら食べることによって克服どころか、好みが 180 度変わってしまうということにとっても驚いた。



最近の学食は建物もきれいでおしゃれカフェの雰囲気。

☆夕食について～何かしらバイキング～

夕食は、手巻き寿司にして、ネタをバイキング形式にしたり、パスタやそうめん、そばなどの麺類をいろいろ茹でて、味付けをレトルトでかけるだけのものや、めんつゆにしてバイキング形式にしたりなどである。家庭で言うところの大皿形式というべきか。

また、2 日目の夕食は、カレーであることが多いが、買い物の中に入れて欲しい（または入れて欲しくない）具の希望を聞いて、辛さやトッピング、付け合せのサラダを選べるようにしている。

1 人 1 食分の食費は 500 円で、夕食であれこれ食べようと思えば少ないように感じるが、参加者やスタッフが合わせて 10 人いれば 1 回の食費に 5000 円使える。そうすると、たとえトロやウニは無理であっても、ツナ缶にマヨネーズを混ぜ、マグロの柵を 1 パック買って来て細く切ったり、刻んでネギトロにしたり、アジを 1 匹、イカを 1 杯、叩いてさばいてとしてみれば、工夫次第でそれなりに 10 人が食べられる、何がしかのすしネタになる。あとは白米をたくさん炊いて、すしの素（粉状）を振りかけてまぜ、シャリとネタを巻くのり（これが一番お金がかかる）を用意すれば、お腹いっぱい寿司が食べられるのである。



みんなでイカをさばいた時。スタッフがヌルヌルした感触に「ギャー！」と叫びながら皮をむく一方、普段はおとなしい参加者が意外に平然と皮をむいていたり。寿司ネタだけでなく、ゲソや耳は炒めておかずにするとも美味。



手巻き寿司にサラダと味噌汁。海苔が一番先になくなってしまふ。

☆間食について①～ランキングという抜け道～

「何食べたい？」と聞いたら何も希望がでないのに、毎年参加者に記入してもらう「いつてみたい やってみたいランキング in 京都」では、「抹茶スイーツ」や「かき氷」「和スイーツ」などは高確率で入っている。



やってみたいランキングへの希望については、観光の一環であるので、特に 500 円と定めてはならず、結果、朝昼晩の食事よりも高額な間食をいただくことになる。

☆間食について②～町家合宿の食を支えてくれているサポーターたち～

そして町家合宿には、1食 500 円以外にも食事を豊かにしてくれる方々がいる。毎年、晩に手作りのクッキーやケーキを持って来てくれる、それだけのために町家に来てくださる臨床心理士の方や、とびきり美味しいおにぎりを握ってくれる、それだけのために町家に夜の数時間来てくれる保育士の方。そしてカレーを作るのに、たまねぎをあめ色になるまで炒めてくれたり、手作りのフナ寿司を持参する発達臨床心理士の方。いずれも対人援助職でありながら、その仕事の忙しさを縫って報酬や見返りなどは関係なく、ただただ美味しい物を町家合宿の参加者のために届けてくれている。



あめ色たまねぎのに入ったカレーは絶品で揚げ野菜のトッピングも美味。あるスタッフが持ってきたジョロキア（世界一辛い唐辛子ソース）に何人か挑戦して大盛り上がり。



スイーツとおにぎりは夜の楽しみ。毎年心理士仲間のIさんが美味しい手作りのスイーツを仕事帰りに持って来てくださる。

☆食べることは選ぶこと

古着交換 (vol.4～vol.5 参照) では、自分以外の誰かの服を選ぶので、その誰かや一緒に選ぶ人たちの中で価値観の交換が行われる。一方、食事の場合は、選ぶのも食べるのも自分である。ということはただただ自分の欲求に従えばいいわけであるので、選ぶのに困ることはそれほどないだろうし、他者の価値観を取り入れることはあまりないだろう。とこれまで私は思っていたのだ。しかしそれはどうも違うらしい。

町家合宿を始めたころは、家にひきこもりがちだったり、インドア中心の生活を送る参加者に、好きなものを好きなだけ食べる喜びを経験してもらえたらいいな、学食とか行けば工夫次第で安くていっぱい食べれるということを知って欲しいな、というぐらいの気持ちだった。自己決定が大事だと言いながら、選ぶということが、どれだけ大変なことで、どれだけの負荷を参加者に課しているのかということあまりわかっていなかったと反省している。

自分で食べたいものを選ぶと言っても、町家合宿においては食べるのは集団の中においてであり、そこには様々なところの動きや価値観の交換がある。

ある年の町家合宿で、その日がたまたま参加者 B さんの誕生日だった。「手作りでごちそうになったケーキが嬉しくて、こんな風で大勢の中で 20 歳になったのだとお祝いしてもらえて不思議に思いながら感謝です」という B さんの感想にもあるように、食を通した他者との関わりの中で、気持ちが動いたりすることは多いのである。

現に私自身も町家合宿で初めて食べて、それ以降食べられるようになったり、好きになったものがいくつかある (カレーの中辛とフナ寿司)。自分のこれまでの食事レパトリーにはなかったものが、すすめられてとか、誰かが美味しそうに食べているところをみて、一口食べてみたら意外と美味しかったなんてことは、日常でも確かにある。やはりそこには他者の価値観の受け入れというものがあるのだと思うし、自分ひとりでは起きることのない変化なのだと思う。

普段からよく言ったり聞いたりする「何食べたい？」という質問が、いかに抽象的で、人を不安にさせるものであるのかということ、それでもその「何食べたい？」は切実な質問であることを、今回町家合宿の食について振り返り、思い知った次第である。